

「しっかりとした足場をきずく」

大本山總持寺 単頭 柴田康裕

長年にわたる風雪や、カラスなどの鳥獣の被害により、ひどく傷ついた向唐門の修復工事が、本格的に始まりました。現在は、巨大な足場が門全体をすっぽりと覆っています。隣の駐車場に大型クレーンが入り、何本もの鉄骨が運び込まれて、かなり大がかりな足場が組まれましたが、安全に工事ができるように、また、一日も早く、確実に修復するためには、最も大切なものであると言えます。

このように、立派な仕事をするために、しっかりとした足場をきずくということは、私たちの修行生活においても、そのまま通じるところがございます。

今年の春に、はじめてご本山に修行にきた青年僧たちも、ようやく七月を迎えました。これまでの間、お経の読み方や法要の仕方、食事のとり方やお風呂の入り方、着物の着方や鐘の鳴らし方など、さまざまな作法やしきたりを学んでまいりましたが、それはまさに、しっかりとした足場をきずくことでありました。つまり、こうした一連の作法を身につけてから、本格的な修行が始まるのです。

これまでは、先輩の指導のもと、言われたとおりにやっていたらよかったです。これからは、その都度自分で考えて判断し、自分自身を律しながら、日々の修行に向きあっていかなければなりません。

一方、別の見方をすれば、足場をきずくという一つ一つの行いが、そのまま大切な修行そのものだとも言えます。「脚下照顧（足もとを見よ）」という禅の言葉が示すように、足場は修行をするための条件ではなくして、それ自体が立派な完成品だということなのです。

七月は、お盆の棚経や施食法要、また恒例の盆踊りもございます。したがって、地域の方々や檀信徒の方々と、直接触れあう機会も増えてまいります。

ご本山で修行をさせていただいているという責任と自覚をもち、しっかりとした足場をきずきながら、さらなる高みに向かって、一步一步ひたむきに精進してまいりたいと思います。